三田新聞

復刻の辞

◎『三田新聞』は大正6(一九一七)年7月6日、慶応義塾の学生自治団体・三田新聞会によって創刊された。『帝国大学新聞』に先立つこと5年、日本で最初の学生新聞の誕生であった。創刊号は4ページ立てのタブロイド版、一面の真中に、福沢諭吉の「慶応義塾は単に一所の学塾として自から甘んずるを得ずその目的は……全社会の先道(ママ)者たらんことを期するもの也」を掲げ、同紙の「創刊語」には、「大にしては三田の輿論を喚起し、小にしては慶応義塾の一報道機関たるべし」と述べられている。以後50余年間、「東洋創始」のスローガンをかかげて継続・発行された。

◎普通選挙運動・社会主義・労働運動に象徴される大正デモクラシー、第一次世界大戦・ロシア革命などの国際情勢、日中戦争、太平洋戦争、敗戦、六〇年・七〇年安保……など時代の波をかぶりながら、慶早戦、学徒動員、学生運動なども含めて『三田新聞』は、学園内外にアンテナをはりめぐらせた。紙上には各々の時代の空気を最先端で感じ、確実に正確に捉えようとする姿勢が、よく表れている。まさに激動の時代を活写したジャーナリズムであった。

←大正6年7月6日、創刊号

◎弊社では、『帝国大学新聞』(のち『東京大学新聞』)、『京都大学新聞』の復刻版刊行に引き続き、『三田新聞』を復刻・刊行する。日本近現代の学術、文化の担い手である大学における学生新聞は、近現代史・教育史研究をはじめ、大学史・文化史・思想史等、幅広い分野で活用されるべき重要資料であるが、その原紙を保存するところは極めて少なく、本紙も幻の稀覯(きこう)新聞であった。広く活用されることを願うものである。

——不二出版

慶応義塾の伝統と激動の時代を活写する日本で最初の大学新聞……復刻成る!

三田新聞

◉全14巻〔大正6年→昭和46年〕・別冊1　不二出版

◉推薦の言葉――五十音順

古稀の『三田新聞』

――阿利資之 ●中日新聞社客員

東洋創始の『三田新聞』として大正六年に発足した慶応の大学新聞も、人間にして見れば今年で七〇歳――古稀の祝いの歳月を迎えた訳である。創刊当時は学生の覇気と熱心な努力、それに大学当局の温かい親心が一体となって実に活気溢れた紙面を発揮し、大正デモクラシー時代の言論機関の先駆となった感があった。発刊当時は学校当局も法学部長の林毅陸博士を会長に推し非常な力の入れ方で、朝日新聞の杉村楚人冠、読売の主筆編集局長の大庭柯公先生らを始めとして、多くの大家ジャーナリストを講師に招いて学会員を指導されたので、学会員も一丸となって活躍した。

そのうえ塾祖福沢諭吉の史蹟記念物とまでなっている演説館の建物まで移築して三田新聞学会と弁論部の言論の道場に提供されたほどだったので、学生の意気は一層燃え立ち目ざましい活動が開始されたものである――順風満帆、遂に五〇周年の発行記念日を迎えて大祝賀会を開き、自ら五〇周年の記念縮刷版を発行したほどであった。

それが戦後の思潮の波に流されて逐に学校当局から弾圧の憂目に遭い、輝く紙歴を閉じたのである。悲しむべき最後である。

それが昨年ハレー慧星の周期にハレー再来のように再刊されるというので、私は創刊当時の苦心物語を書いて激励したが、残念なことに昔日の面影なく、二、三号続刊されたが、また消息が薄れて来ている。

こうした最中に不二出版が、散逸した『三田新聞』を収集して完全な縮刷版を刊行されるという。多大の費用、非常な苦労がかかることと思うが、言論界、学園の新聞研究の資料として真に敬服すべき大事業と思う。

我ら『三田新聞』の先輩の一人としてこんな喜ばしい事はないと思う。感謝すると共にその完成を心から祈るものである。

脈打つ自由と青春の軌跡

――石川忠雄 ●慶応義塾長

『三田新聞』が創刊されたのは、大正六年七月六日のことである。同新聞のOBたちがひそかに誇りとしているように、この発行は日本ばかりか東洋における学生新聞の嚆矢をなすものであった。爾来昭和四六年一二月の休刊まで、終戦前後、若干の空白があったにせよ、半世紀を越える歳月を通じて、長く発行され続けてきたこと自体、その努力は高く評価されてよい。しかもその半世紀が、戦前・戦中・戦後という、日本の歴史のなかでも、最も起伏に富む激動の時代であったことも、また忘れてはなるまい。

というのは、時代の息吹きを逸早く捉え、その動きに多感な反応を示すのは若い世代、なかでも大学に学ぶ青年たちであるからだ。それゆえ『三田新聞』の過去を辿ることは、夫々の時代を知る上で、朝日、毎日、読売といった、一般の大新聞のバックナンバーを繰るのとは、ひと味違った時代の側面を、その紙面を通してかぎとることも可能となろう。

従って今回『三田新聞』の縮刷版が、別巻を含めて全一五巻に集大成されることの意義は、きわめて大きいものといわねばなるまい。

かつて『三田新聞』が創刊二〇周年を迎えたとき、時の塾長小泉信三博士は、この新聞への期待として、「記事の真実性を重んずること、論評の調子を高くすること」の二点を求められたが、長い年月の推移のなかには、卒直にいって、時にそれを逸脱したと思われる時期もなくはなかった。だが今となってみると、それも純粋さを追い求める過程での過誤ともいいうると、少なくとも私は考えている。

ともあれ慶応義塾の塾生たちが、『三田新聞』という学生新聞のマスメディアを通じて、精一杯の自由と青春を謳い上げた軌跡が、そこに力強く脈打っていることはたしかである。

学生新聞の中心として

――加藤 寛 ●慶応義塾大学経済学部教授

いまでこそ学生新聞もいろいろ発行されているが、私が関係していた当時は『三田新聞』しかなかったから、その

◉『三田新聞』復刻刊行を推す（五十音順）

阿利資之――中日新聞社客員

加藤 寛――慶応義塾大学 経済学部教授

寺尾 誠――慶応義塾大学 経済学部教授・現主幹

石川忠雄――慶応義塾長

佐藤公偉――読売新聞社 新聞監査委員会幹事

富田正文――社団法人福沢諭吉協会 理事長・元主幹

←大正9年8月12日、第51号

東洋創始の大正九年八月十二日（木曜日）三田新聞（一）

THE MITA SHIMBUN
Published by
The Mita Association of Journalism
The Keio-Gijiku University

論説

學生と社會主義趨向

思想と國民性

阿部教授講演

經濟恐慌來襲と其對應策

粕谷源蔵

曉光已に見ゆ

元山より

高原より

泉 愛雄

強者

表明

新刊紹介

本紙次號發行

Whatever you need in
Kodaks, Cameras, Lenses
First-class merchandise—moderate prices—
prompt service guaranteed
MITSUWA
Shinbashi, Tokyo

新刊
詩集 地上の光
藤村・獨歩・晩翠・泣菫・白秋・白鳥・泡鳴・露風・白蓮・春月・芳水・有明・虹村・月光・星・星・諸氏を始めとして現代五十餘名の代表的詩人の作品を網羅し、明治・大正・昭和三代の詩壇を飾る珠玉の作品を一堂に集め、詩人の生命を生かせるように、詩人の作品は、詩人の作品を生かせるように、詩人の作品は、詩人の作品を生かせるように、詩人の作品は、詩人の作品

一九一八年

大正7年2月
大正7年12月

ニュース

青木博士の超越／卒業生の売口 11
徳三博士憤怒す 12
大学予科生入学数／支那学生会特別科／水野博士親任／慶応義塾英語会／名誉の五秀才／卒業式／同窓会／慈善大音楽会／鹿子木教授インド行／大正七年三月大学部卒業生 13
慶応義塾大学予科入学試験問題（大正七年度） 14
就職は容易なり／大臣と学生四人／藤瀬政治郎氏の寄附 15
第二の春を迎えた医科／新学年と各科の陣容／三田新聞会 16
編集室より／ワグネルソサイエティーの演奏会／少年雄弁大会／阿部教授の歓喜、卒業生の功績に 17
史学科研究会／各部会の噂？／面白い投書 18
名古屋講演詳報／哲学研究会／史学科研究会 19
義塾医科大学の建設工事大いに進捗す／塾生は先生の記念碑なり法律科学生大懇親会／熊谷氏の出発 20
南米に行く宮島医学博士／夜学部の先輩と其事業／美しき企て勤続二十余年の葦原雅亮氏 21
理財学会春季大会／史学科研究会／愛塾対話 23
都下各大学連合演説会／大学教授になった間崎、鈴木の両氏／塾長の「三田新聞」観、三田演説会でジョン君の魔の手、読心術を見る／立派な先輩と膝を交えて成功の秘伝を聴く 24
各地の三田会／名古屋講演詳報／教務監督語る／商業学校卒業式／岡村博士が講師で植物学講習会／哲史両科の機関誌 25
就職よりも卒業論文／日本最初の読心術者／物価騰貴が学生に及せる影響の実際／南洋に活動する夜学出の青年／板倉教授知事を喝破す／堀切教授厳父死去／天沼教授の死去 28
補欠編入試験合格者 31
外紙に表われたる三田新聞評（英文）／米価調節には先ず統計を作れ高城教授談／各地三田会／鎌田塾長渡支 33
盛なりし講演会、米大使館参事官来場／新築成れる剣道部道場／新入学の喜び補欠試験優等合格者談 35
ヒルムになった『二都物語』予報 36
三田新聞学会主催の新聞展覧会開かる／預金争奪に就て古河、豊国両銀行支店長は曰く／鎌田塾長大連に着／普通部欄—地歴教室及び標本室／新任所感—有馬祐政氏 37
お祖父様のお帰りが待ち遠しい初子嬢、塾長留守宅を訪う／三田識会の召集近し／新聞展覧会重要出品目録／ホテルの広間にてアルゼンチン公使館員と語る 40
大講演会彙報／本会晩餐会／慶応義塾同窓会 41
鎌田塾長帰京／塾長に随行せる吉田氏を訪う／新聞展覧会盛況裏に終る／講和来らんか卒業生の売行如何／有泉先生御見舞の記／大学部本科制帽改正案 43
城南の古跡（続） 45
甘蔗先生百五十年記念会の記／家族的な寄宿舎の茶話会／新聞展覧会と予科作文／政党内閣祝賀大園遊会／新聞学博士ウィリアムス氏の快弁 47
正義の詩を絶叫しつつ六千のカンテラ三田を発す／竹之会大演奏会／福沢社頭の令嬢小山夫人死去 48
物価と通貨、山本悌次郎氏講演／通信事業の現状、東川嘉一氏講演 49
偏頗を排す原首相の演説／大岡育造氏演説／加藤政之助氏演説／清水教授一行弁論部員の八王子市学術講演 52
政党内閣成立祝賀大園遊会で歓喜に満ちた稲荷山／盛なりし医学科大会／各自の自尊心に訴えより他は無い金田学生監の話 53
来年度卒業生の売口は天井知らずの好景気／三田へ新任された医科教授岡島博士／海外に於ける三田新聞の評価 54

スポーツニュース

慶応同志社ラ式蹴球戦 55
慶応義塾山岳会通信／柔道部道場使り対一高戦 11
理財科また優勝す！ 15
山岳会員、アジア大陸を国際庭球大会／野球部の成績 16
水泳部の活動／庭球部選手の軽井沢遠征／熊谷氏の名声ニューヨーク州を圧す 17
米国庭球界の大恐慌／普通部三度優勝、京浜野球大会 24
二十五哩マラソン予報 20
戦績一束 17

論説

心は元禄武士の如くに／良教師論 11
卒業論文に就いて 12
今後のシベリア（大庭柯公講演） 11
英国の皇室（占部百太郎） 19
宣言／新聞学校に就て（小林澄兄）／新聞経営の要義（小野瀬不二人） 17
アングロサクソン人種の将来（林毅陸） 27
高等教育改善の必要（畑功）（英文） 35
新聞自由問題／慶応義塾英語会の主張（英文） 39
帝国当面の外交問題（望月小太郎）／戦後の経営（Sotaro Namae）（英文） 43
退任之辞／新任之辞 47
送年の辞／講和と学生の進路（田中萃一郎談）／新らしき新聞事業（ウィリアムス）（英文） 48

政治・経済

現内閣の財政経済策（堀切善兵衛談）／米国新聞政策 52
此膨脹せる通貨を奈何せん 48

科学・思想

プロレタリアの特殊的地位（大谷誠一抄訳） 39
哲学と生（永田鼎） 30
ウィリアムス博士の来朝と国家広告の意義 35
江戸の文明(1)（永田鼎） 38
最近の露国国情（今井政吉講演） 35
江戸の文明(2)（永田鼎） 39
寓話—良き両親を持て／近代劇に現われたる最近思潮（宮森麻太郎談） 42
人形芝居の研究（小沢愛圀） 30
イギリス文学所感（戸川秋骨）／寓話—三弗高から ず（佐々木邦訳） 27
慶応義塾英語会—笑劇「杞憂」・笑劇「下男の頓智」・喜劇「解けたもつれ」 38
将来の黙阿弥物（花房紅二） 30
独逸語の過去（続）（飯田忠純） 27

文学・芸術

小説

膝鹿毛秋の大和路（不二松夫） 56
死（永田五男） 46
醜き魚の呪い（阿羅加美） 46
初秋（原田弘） 42
恐怖（澪石） 32

随筆

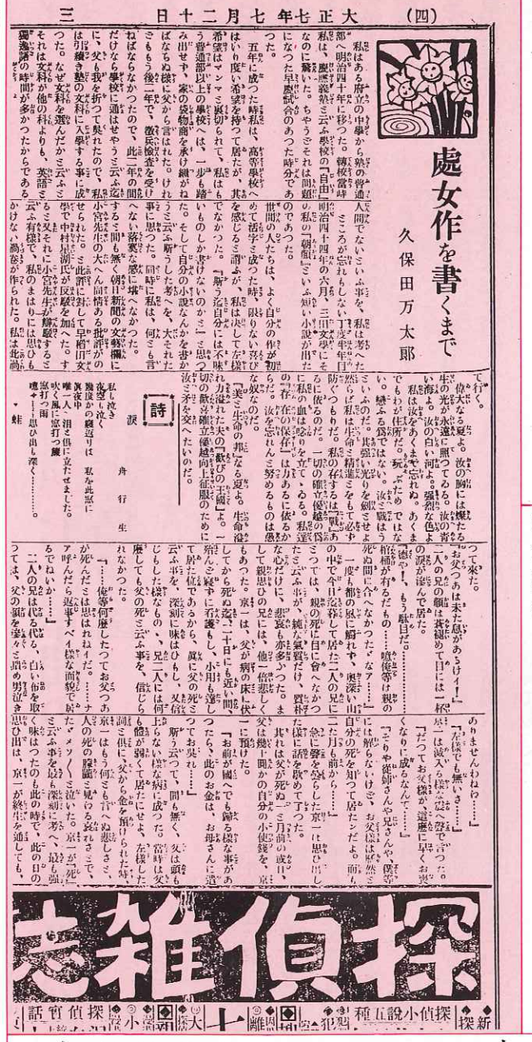
福翁墓詣／暗黒と彼れと／怠者の制服者！ 26
ワグネル・スカルスキイ氏と柳兼子夫人と 12
学窓より社会へ（大内穣）／三田の臭 11
「小僧さん入用」（飯野青雄） 14
悪評に対する態度 17
処女作を書くまで（久保田万太郎）／「スウム・エッセ・コンサーバレ」（青木茂） 19
幼稚舎生徒海水浴（江沢久一） 20
大江戸の情調を偲ぶ—影絵の会 26
小川末明氏へ（花房紅二） 29
ヤコヂウスキイの歌（茅野鼎々） 30
秋は寂しい（原田弘） 42
谷崎潤一郎氏へ（花房紅二） 46

詩歌

ゆき（瀬川菊之丞） 50
募集俳句（眩花、久美、轍鮒）／募集短歌（久二夫、ひろ瀬、久美） 56
短歌（京一生、他）／ケイク／俳句（草時雨、他）／口語詩 11
短歌（芳雄、他）／慶応俳句会／俳句（玉泉、素純） 12
慶応俳句会 18
詩—涙（舟行生）・蛙（花房紅二）／短歌（小島生、他）／上海の歌（KO生） 25 22
詩と短歌（透、かずひと、甘郎、秋羊） 30 26

→第1巻記事索引より

→大正7年7月20日、第11号より



大正七年七月十二日　三　（四）

處女作を書くまで

久保田万太郎

私はあの歴史の中學から発行通人間でないといふ事を、明治四十年に移つた。横浜の「自由」は、慶應義塾の「三田」になつた早稲田の方のあつた時分で、私は、高等學校へ五年に成つて、一年に成つた。はい度、高等學校へ、はい度、高等學校へ、希望はマンマと裏切られて、私は、一歩も路へ出せず、家の袋物商へ、一歩も路へ出せず、家の袋物商へ、一歩も路へ出せず、家の袋物商へ

な歩みが、読みとれよう。同年九月一九日の第一二号には、『ジャパンアドバータイザー』紙に、This is the first and the only Japanese newspaper published by university students. と書かれたことが紹介されている。

大正六年(一九一七年)の一一月には、ロシア革命が起っているが、大正七年の六月五日付の第八号には、すでに「今後のシベリア」と題する講演の記録がのせられ、学生の「プロレタリアの特殊的地位」という小論もある。初期の『三田新聞』は、大学内の様々な記事が多いけれども、同時に、こうした国際的な事件に対しても鋭敏な記者感覚が発揮されているのだ。そうかと思うと、同年七月一二日の第一〇号の文芸欄には、久保田万太郎の「処女作を書くまで」という貴重なエッセイがある。その後も久保田万太郎以外では、小島政二郎、小山内薫などの三田出身の文人が登場しており、すでに存在していた文芸誌『三田文学』との密接な関係が推測される。

また大正五年(一九一六年)に、憲政拡充の論文を公表した吉野作造は、大正七年には新人会を組織し、これが大正八年の普通選挙運動の発端となった。『三田新聞』の順調な歩みの背景には、大正デモクラシーの盛り上りがあったのである。否、『三田新聞』は、大学新聞という新しいメディアをもって、この運動に先駆的な参加を成しとげたといえよう。

昭和になってからの日本及び世界の歴史の激動はいうまでもない。その只中で、福沢諭吉の建てた私学慶応の味わった明暗多くの経験を、今回の縮刷版『三田新聞』で追体験することは、歴史の真実を追究する凡ての人にとり有意義であろう。

七〇年間の学生思想界の鳥瞰図

——富田正文 ●社団法人福沢諭吉協会理事長・元主幹

私などが慶応義塾に入学したとき(大正九年)には、既に『三田新聞』は存在していた。「東洋創始」という肩書をつけた唯一の学生新聞であった。それは学校内の出来事を報道するだけでなく、広く一般社会の政治・経済・学問・教育・思想・芸術などの諸相や潮流を、学生の眼で捉え、これを報道し考察し批判するための機関として刊行されていたもので、当時第一流の新聞人が指導者として参加していた三田新聞学会の実習機関であった。

創刊当時の関係者は今は悉く故人で、私など同時代人も僅かに数えるほどしか遺っていない。その七〇年の歴史を顧みるとき、われわれは今更のように歳月の忙しさを感ずるのである。

関東大震災で東京全市の印刷所が潰滅したとき、学会員の学生たちは震災特集の原稿をかかえて近県各地を尋ね歩き、やっと宇都宮で引受けてくれる工場をみつけ、刷り上った新聞を必死でまもって、超満員の列車の屋根の上にへばりついて東京まで持ち込んだ話などは、感激そのもので聞いたものであった。

もちろんキャンパスを襲う思想の嵐と波濤とは避けて通れるものではなかった。いや、むしろ学会員たちは積極的にこれに参加し、時にはこれを煽動するような態度に出たことさえあった。或る事件に関し学校当局が『三田新聞』の存在を許して置けないから学会を解散させようとしたことがあった。当時その相談にあずかった私は、その措置に反対し、今ここで学会を潰しても、学生たちは塾外で新聞発行を続けるに違いない、弊害はむしろ一層はなはだしいと思うから、むしろ然るべき指導者を与えて、記事の正確と論調の中正を期すべきであると主張したところ、後にNHKの会長になった永田清教授がそのときの三田新聞学会長で、それなら君がその役を引受けてくれと言い、学会始まって以来はじめての「主幹」という役を押しつけられた。学生たちは塾当局から天降って来た主幹などは有難迷惑であったに違いないが、しかし危うく潰されそうになった新聞の命脈をつないでくれた功労に免じて、しぶしぶ受け容れてくれたようである。当時の学会員学生であった諸君と私は今日もなお親しい交際を続けている。

いまその復刻が刊行されると聞き、七〇年間の学生思想界の鳥瞰図に接することができると思い、感慨無量なるものを覚えざるを得ない。

→大正8年1月22日、第18号より

●大学新聞復刻版のご案内

帝國大學新聞 全17巻・別冊1

『帝國大學新聞』は大正9年12月25日に創刊。昭和19年紙名を一時『大學新聞』と改めるが、その後再度同紙名に復し、昭和23年まで一、一〇〇号発刊された。当初は週刊四ページ立てであったが、昭和8年より十～十二ページとなり、当時の大学新聞の中でも量的にもまた質的にも他に抜きん出ていた。

『帝國大學新聞』の発行は、編集・製作部門には学生があたり、他に専従の職員が広告事務を担当し、一般紙に引けを取らない内容を誇っていた。紙面には学内記事は勿論、その時々の社会問題、思想問題を論じ、ライターには大正・昭和期を担った多くの政治家・学者・文化人が多数登場する。

◎推薦＝伊藤隆・内川芳美・小田切秀雄　寺崎昌男・殿木圭一ほか

大正12年→昭和23年
A4判・上製・函入り
総7、754頁
別冊＝記事・執筆者索引
(分売価＝一八、〇〇〇円)
揃定価＝三〇万円

東京大学新聞 全11巻・別冊1

戦後、東京大学における学生新聞は、『帝国大学新聞』の休刊のあと、昭和24年1月28日『東京大学学生新聞』としてスタートする。

この『東京大学学生新聞』は、学内団体の東京大学学生新聞会の発行、週刊二ページ立て(のちに四～八ページ)、昭和32年3月まで合計二八七号発行される。その後、同年4月より(財)東京大学新聞社によって『東京大学新聞』が復刊され、『東京大学学生新聞』を吸収・継承し、現在まで継続刊行されている。

この敗戦後の時期において『東京大学学生新聞』『東京大学新聞』は、大学・学術全般の刷新と社会体制の変革をもリードする役割をになっていた。

◎推薦＝伊藤成彦・内川芳美・伴野文夫　樋口恵子ほか

昭和24年→45年
A4判・上製・函入り
総4、276頁
別冊＝記事・執筆者索引
(分売価＝一五、〇〇〇円)
揃定価＝二〇万円

京都大学新聞 全9巻・別冊1

『京都大学新聞』は大正14年4月15日、『京都帝国大学新聞』として創刊され、「滝川事件」を始めとする京都帝大内外の情報を提供し続けた。敗戦前後に『大学新聞』に合流するが、昭和21年4月より『学園新聞』のちに『京都帝国大学新聞』の巻号を継承した『京都大学新聞』と改題して今日に至っている。

『京都大学新聞』60年間の歴史は、激動の昭和史を伝える貴重な資料であり、大学の自治と学問研究の自由の誇るべき伝統をもつ京都大学において、人文科学・自然科学・芸術等多岐にわたっての、知識人による青春のドキュメントを伝えている。

◎推薦＝飛鳥井雅道・松尾尊兊ほか

◎取扱古書(大正14年→昭和45年)
大正14年→昭和55年
A4判・上製・函入り
総7、147頁
別冊＝記事・執筆者索引
(分売価＝一五、〇〇〇円)
揃定価＝一六万円
(各巻定価＝一五、〇〇〇円)

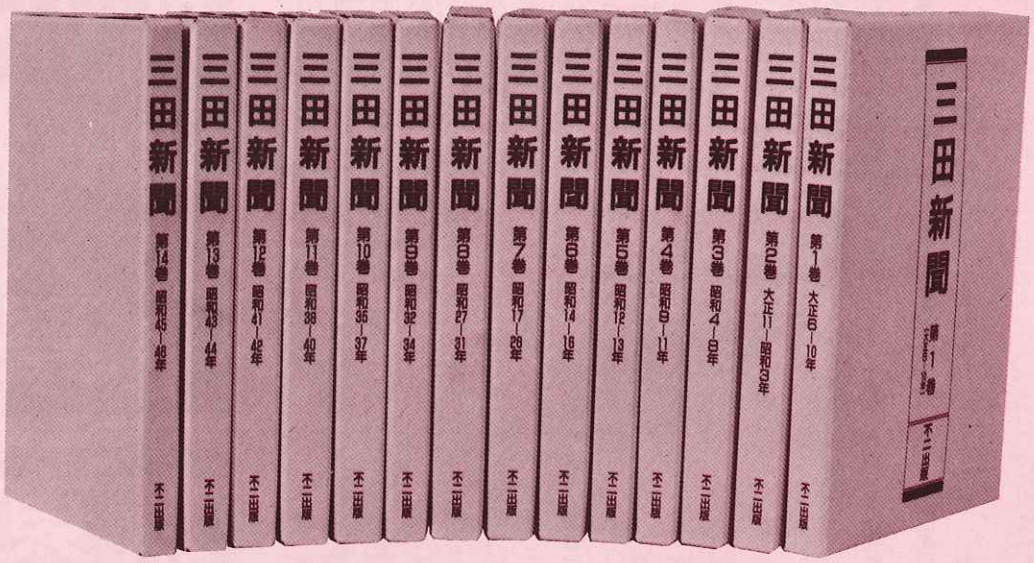
早稲田大学新聞 全10巻

『早稲田大学新聞』は、大正11年11月5日、早稲田大学新聞会によって創刊された。以後今日まで、早稲田大学唯一の機関紙として、敗戦前後の一時期を除き、刊行され続けている。紙面は常にその時代時代をリードした作家・政治家・評論家・学者・ジャーナリスト・社会運動家など一流の執筆陣で埋め尽くされており、建学以来の社会・歴史に対する批判精神がはっきりと見てとれる。日本近代史研究に必須の基礎文献といえよう。

復刻版販売にあたって、戦前版(大正11年～19年)と戦後版(昭和21年～昭和33年)とした。また各巻巻頭に記事索引が、戦前版・戦後版のそれぞれ最終巻に執筆者索引が、付されている。

◎取扱古書
大正11年→昭和19年(戦前版・全7巻)
昭和21年→昭和33年(戦後版・全3巻)
A4判・上製・函入り
総3、618頁
販売特価＝九万円(定価 一四万円)
〔戦前版＝六万円(定価 九五、〇〇〇円)
戦後版＝三万円(定価 四五、〇〇〇円)〕

三田新聞 全14巻〔大正6年→昭和46年〕・別冊1



◉復刻版概要

体裁——A4判・上製・函入り・総五、一五四ページ
索引——各巻の巻頭に《記事索引》を付す
別冊——『三田新聞』記事・執筆者索引
配本——一九八七年五月→八八年二月（計四回配本）
定価——二六〇、〇〇〇円（全一四巻・別冊一）
●別冊のみ分売可・定価一八、〇〇〇円
（原本未発見による欠号ページが一部あります。）

◉配本予定

第一回配本
- 第一巻 大正6年→10年
- 第二巻 大正11年→昭和3年
- 第三巻 昭和4年→8年

八七年五月発売 定価六五、〇〇〇円

第二回配本
- 第四巻 昭和9年→11年
- 第五巻 昭和12年→13年
- 第六巻 昭和14年→16年
- 第七巻 昭和17年→26年

八七年八月発売 定価六五、〇〇〇円

第三回配本
- 第八巻 昭和27年→31年
- 第九巻 昭和32年→34年
- 第十巻 昭和35年→37年

八七年十一月発売 定価六五、〇〇〇円

第四回配本
- 第十一巻 昭和38年→40年
- 第十二巻 昭和41年→42年
- 第十三巻 昭和43年→44年
- 第十四巻 昭和45年→46年
- 別冊

八八年二月発売 定価六五、〇〇〇円

不二出版
東京都文京区向丘一—二—一二
TEL ○三—八一二—四四三三
FAX ○三—八一二—四四六四
振替 〈東京〉六—九四〇八四